

Deutsches Institut für Japanstudien
ドイツ-日本研究所

DIJ CULTURAL STUDIES WORKSHOP

お化けと近代化
～ 不思議と科学的思考の間で ～

1997年7月31日



会 場

ドイツ-日本研究所
東京都千代田区九段南
3-3-6 ニッセイ麹町ビル2F
Tel.: 03-3222-5077 / Fax: 03-3222-5420

企画担当： リゼット・ゲーバルト
(Lisette Gebhardt)

事務担当： 杉本 栄子

お化けと近代化
～ 不思議と科学的思考の間で ～

- 14:00 開会の挨拶
リゼット・ゲーパルト (ドイツ-日本研究所)
(Lisette Gebhardt)
- 14:15 〈こっくりさん〉のディスカール
一柳 廣孝 (横浜国立大学)
- 15:00 怪を語る二様の言葉 — 井上円了と柳田国男
横山 泰子 (江戸東京博物館)
- 15:45
↓ 休 憩
16:10
- 16:10 西洋人の日本のお化けへの憧れ — 近代女流画家 Cäcilie Graf-Pfaff の場合
安松 みゆき (立教大学)
- 16:55 「神経」とノスタルジア — 近代作家とお化け
リゼット・ゲーパルト
- 17:40 総合討論
コメンテーター： 梅澤 ふみ子 (恵泉女学園大学)
林 正子 (岐阜大学)
ジョナサン・ホール (University of California Santa Cruz)
(Jonathan Hall)
- 18:30 懇親会 ドイツ-日本研究所ホール

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

<発表は30分間、その後15分間のディスカッションを行います>

趣 旨

第2回「DIJ文化研究ワークショップ」では、明治・大正時代の近代主義と反近代主義の論議を取り上げてみる。前世紀転換期に日本では、不思議をめぐって数々の注目すべき論争が行われた。学者や作家たちが迷信と近代科学思想について意見を闘わせたのだが、そこには大きく二つの傾向が現れていたといえる。一つは古い考え方を迷信として切って捨てるものであり、もう一つは西洋伝来の新しい考えを優先することに疑問を感じるものである。

その時代に「お化け」の再来現象がみられた。それはもっと大きな文脈で捉えてみれば神秘的、幻想的なものの再評価といえるであろう。お化けのディスクールは当時の知識人の活動の一部をなしていたが、彼らは近代化によって失われた「故郷」を取り戻すことを望んでいた。

今日、日本の研究者たちは再び「お化け」というテーマに注目している。それは現在のオカルトブームとも関係しているが、明治・大正時代のお化けのディスクールを再評価することによって、近代日本の思想史の主な論点のいくつかが明らかになるからである。

今回のワークショップでは、明治・大正時代の文学以外にも心理学や宗教学など当時の近代的科学思想からなる不思議論に注目し、近代的自我の成立が、日本人の心理にもたらした衝撃の深さを測定してみたいと考えている。

発表内容とテーマに関する著書の紹介

〈こっくりさん〉のディスクール： 一柳 廣孝（横浜国立大学）

明治10年代に日本に到来した「こっくりさん」は、さまざまなイメージを吸収しながら現代にまで至っている。日本の小・中学校では、放課後の教室の片隅で生徒たちが集まり、不安と恐怖を胸に抱きつつ、いまも「こっくりさん」にお伺いをたてている。

坪内逍遙、斎藤緑雨、宮沢賢治らの周辺情報にも姿を現している「こっくりさん」は、日本の近代化にあたって消去されるはずだった妖しの存在たちが身を潜める、残された岩のひとつとなったのだ。

今回の発表では、「こっくりさん」が精神医学、心理学によって「合理」のフレームに位置づけられていくプロセスから「神経」「脳」と「心」という概念の認識的な附置の問題を探るとともに、日本的な「霊」的世界のなかへ「こっくりさん」が回収されていく状況を確認することで、「こっくりさん」をめぐる言説のありかたについて言及してみたい。

著書と論文：『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉日本近代と心霊学』（講談社）1994
「芥川龍之介・幽霊・心霊学」『幻想文学』47 P.122-127 1996

怪を語る二様の言葉－井上円了と柳田国男： 横山 泰子（江戸東京博物館）

東洋大学の創始者である井上円了は、啓蒙主義的な仏教哲学者として、あるいは教育家としてもつばら位置づけられてきた。しかし、当時「お化け博士」と呼ばれた彼の、膨大な妖怪研究の思想的社会的な意味を考えねばならないと思う。そして円了の妖怪学を批判した柳田国男の妖怪研究との対立点、共通点などを見出していきたい。

著書：『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房）1996
『四谷怪談は面白い』（平凡社）1997

西洋人の日本のお化けへの憧れ－近代女流画家 Cäcilie Graf-Pfaff の場合： 安松 みゆき（立教大学）

Cäcilie Graf-Pfaff (1868 - 1939) は、ドイツ近代の女流画家であり、特に水彩画や銅版画において活躍した作家である。ドイツではヒトラーによって彼女の作品が買い上げられるなど、ナチとの関わりのためか長らく等閑に付されてきているが、日本では森鷗外や画家の原田直次郎のドイツ留学時の事情を知るために以前より注目されてきた。発表者は、そうした従来の論点をはなれ、むしろドイツでの日本美術の流布に大きく貢献した人物としてGraf-Pfaff自身に着目する。

今回の発表では、Graf-Pfaff が画家であった夫 Oskar とともに編集し、彼女自らが本文をかいた『日本の妖怪 Japanese Gespensterbuch』をとりあげる。美術作品を通して日本の妖怪を論じたこの希有な書物において、彼女がどのような形で日本の妖怪を紹介しようと考えていたのかを考察する。

論文：「ドイツ近代女流画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフと『日本の妖怪』」『堀越学園・大学・専門学校紀要』第5巻 P. 47-63 1997

「神経」とノスタルジア－近代作家とお化け： リゼット・ゲーバルト（ドイツ-日本研究所）

日本の近代作家は繰り返し、お化けをテーマに取り上げているが、それには特別な意味がある。近代に特有のノスタルジアの感情と、近代人の消耗した神経、この二つのいずれかが、あるいはその両者が同時に、作用した結果だと思われるのだ。お化けが失われた不思議な世界、いうならば原故郷の象徴であることを示す端的な例は、柳田国男の『遠野物語』である。その原故郷を回復すべく、お化けを取り上げた作家として泉鏡花と内田百閒の名をあげることができよう。他方、近代都市住民の病んだ神経が見る幻としてのお化けや妖怪は、芥川龍之介、豊島与志雄や寺田寅彦の作品の常連である。そこではお化けは、近代人の神経状態を表す症候にほかならない。お化けを巡る近代作家のディスクールは、それ自体が近代意識の所産であり、作家たちにとって空想と近代科学の狭間にひろがる無意識の地下世界への冒険行だったといえるのではないか。

論文："Iki - Der Diskurs zur "Arten Welt" als Manifestation der japanischen Selbstfindungs-Debatte". In: *Überwindung der Moderne? Japan am Ende des zwanzigsten Jahrhunderts*. Frankfurt/Main, 1996, S. 146-171
"Fukurai Tomokichi. Ein japanischer Forscher zwischen Sedenkunde und Spiritismus". In: *Intellektuelle in Japan. Japan-Lesebuch*. Tübingen (1997 出版予定)